NO.19　発行：神宮館　東京都台東区東上野 1-1-4　TEL03（3831）1638　http：//www.jingukan.jp　発行人：木村通子

ももとせ便り

winter
平成二十四年壬辰
冬号

七十二候

一年を七十二の季節に分け、気象の動きや動植物の変化を五日ごとに表現したもの

十一月七日ころ　立冬（りっとう）

五十五候　**水始氷**（みずはじめてこおる）七日～十一日ころ
寒さが厳しさを増し、水も凍り始める時節

五十六候　**地始凍**（ちはじめてこおる）十二日～十六日ころ
陽気も消え失せ、大地も凍り始める時節

五十七候　**金盞香**（きんせんこうばし）十七日～二十一日ころ
冬の気配が強くなり、水仙の花も咲き出す時節

十一月二十二日ころ　小雪（しょうせつ）

五十八候　**虹蔵不見**（にじかくれてみえず）二十二日～二十六日ころ
空に陽気もなくなり、虹も見かけなくなる時節

五十九候　**朔風払葉**（さくふうはをはらふ）二十七日～十二月一日ころ
北風が木の葉を払いのける時節

六十候　**閉塞而成冬**（へいそくしてふゆをなす）二日～六日ころ
天地の気が塞がって真冬となる時節

十二月七日ころ　大雪（たいせつ）

六十一候　**鶡鳥不鳴**（かつちょうなかず）七日～十一日ころ
やまどりも鳴かなくなる寒い時節

六十二候　**熊蟄穴**（くまあなにちっす）十二日～十七日ころ
熊が冬眠のため自分の穴に隠れる時節

六十三候　**荔挺出**（れいていいずる）十八日～二十一日ころ
寒気強まり、おおにらが芽を出し始める時節

十二月二十二日ころ　冬至（とうじ）

六十四候　**蚯蚓結**（きゅういんむすぶ）二十二日～二十六日ころ
みみずが寒気で、地中でかたまりとなる時節

六十五候　**麋角解**（びかくげす）二十七日～三十一日ころ
大鹿もその角を落とす時節

六十六候　**雪下出麦**（せっかむぎをいだす）一月一日～四日ころ
一面、雪におおわれていても、その下では麦が芽を出し始める時節

一月五日ころ　小寒（しょうかん）

六十七候　**雁北郷**（かりきたにむかう）五日～九日ころ
雁（がん）が北へ向かって渡る時節

六十八候　**水泉動**（すいせんうごく）十日～十四日ころ
地中で凍った泉が動き始める時節

六十九候　**野雞始雊**（やけいはじめてなく）十五日～十九日ころ
雄の雉（きじ）が鳴き始める時節

一月二十日ころ　大寒（だいかん）

七十候　**雞始乳**（にわとりはじめてにゅうす）二十日～二十四日ころ
鶏が春の気を感じ、卵を産み始める時節

七十一候　**鷙鳥厲疾**（しちょうれいしつす）二十五日～二十九日ころ
鷲や鷹などが空高く、かつ速く飛び始める時節

七十二候　**水沢腹堅**（すいたくあつくかたし）三十日～二月三日ころ
沢に氷が厚く張りつめる時節

お茶の入れ方と出し方

日本茶には日本の水・軟水が最適

軟水を使って一度沸騰させる

水道水を使う時は、浄水器を使うのが便利ですが、そのまま使う場合は、二～三分以上沸騰させるか、四～五時間以上汲みおいて、カルキを抜いてから使います。ミネラルウォーターを使う場合は、外国産の硬質の水ではなく、軟水を使って、いちど沸騰させて使います。

上煎茶は七十度、並煎茶は九十度が目安

玉露などの高級茶は六十度以下の低い温度で、玄米茶やほうじ茶は高い温度の熱湯

玉露や上煎茶は低温でじっくり時間をかけて、並煎茶は少し高温で旨味と香りを出します。玄米茶やほうじ茶は、茶葉の量を多めにして、熱湯で香ばしい香りを出します。

急須に茶葉を入れ、お湯を注いだ後は、葉が開くまで揺すらずに静かに待ちます。

複数の人数にお茶を入れる時は、濃さが均一になるように少しずつ茶碗に注ぎ入れ、急須の最後の一滴まで注ぐようにします。

上座のお客様の右後方に回って、右側から出す

茶碗と茶托は別にしてお盆に乗せ、茶托を持って出す

運んだ時にお茶が茶托の上にこぼれないように、お茶を注いだ茶碗と茶托は別にしてお盆に乗せ、きれいなふきんも用意します。ふきんで茶碗の底をふいてから茶托に乗せ、茶碗の絵柄がお客様の方に向くように茶碗の向きを揃えて出します。

お湯の温度

① 沸騰させたお湯は、ポットに移すと90℃になる
↓
② ポットから茶碗に注ぐと75℃になる
↓
③ 6～7分置くと60℃になる

茶の種類	お湯の温度	時間
玉露	60℃	2～3分
上煎茶	70℃	1～2分
並煎茶	90℃	1分
ほうじ茶	熱湯	30秒
玄米茶	熱湯	30秒

※季節や室内の温度により、お茶を入れる時間の目安が変わります

知っておきたい しきたり

分かっていそうで、分かっていない！
そんなことがありませんか？
あ、そうだったんだ！　と気がつくことがたくさん。
昔から大切にされてきた「しきたり」を
もう一度見直しましょう。

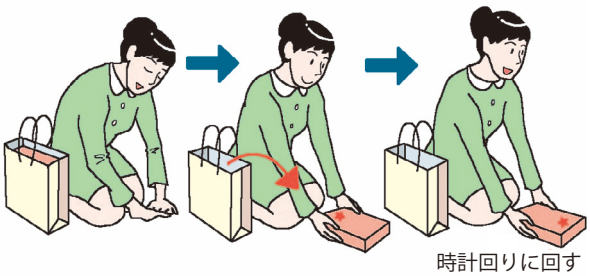
イラスト：下田麻美

手土産の選定と渡し方

残るものより、消耗できる手土産

相手の好みが分かっていれば、その品を。分からないときには、お菓子などの食品を

訪問先の人数や好みを考えて選びましょう。相手の好きなものはもちろん、生活スタイルを考慮して選びます。ケーキなど個数を考えなければならない時は、訪問先の人数より多めの数にします。さらに家族や会社の方みんなで楽しめるものにするのがよいでしょう。



時計回りに回す

購入は、訪問先の近くではなく、前もって用意したと分かるような有名店や老舗で購入するのも喜ばれます。

持参する際は、風呂敷などで包むか、紙袋に入れて持って行きます。

正式な挨拶が終わったら渡す

客間に通されて、挨拶を交わした後に、言葉を添えて手土産を渡す

挨拶が済んだら、手土産を風呂敷や紙袋から取り出して、品物に粗相がないかをチェックし、時計回りに回して相手に正面が向くようにして両手で差し出し、「心ばかりですが」などと言葉を添えて渡します。

また生鮮食品やアイスなど、冷蔵庫や冷凍庫に入れる必要があるものは、玄関先で言葉をかけて先に渡します。

風呂敷や紙袋は素早くたたみ、手持ちのバッグなどにしまいます。もし処分をお願いする場合は、「恐れ入りますが、袋の処分をお願いしてもよろしいでしょうか」と声をかけて渡します。

季節の花

古くから伝わる花の名前の由来や逸話を紹介

日本スイセン

和名は雪中花、漢名が水仙華、室町時代の書物に登場

ヒガンバナ科スイセン属の多年草。房咲きスイセンの変種で、越前海岸に自生している

地中海地方の原産ですが、中国を通じて遣唐使が薬用植物として持ち込んだものが野生化したという説と海流にのってやってきた、という説があります。福井県の越前海岸や静岡県の爪木崎、兵庫県の淡路島などに群落しています。花弁が白く副花冠が黄色い小さな花が、十二月から三月に咲きます。

侘助（ワビスケ）

花は小さな一重咲き、実はつかない

ツバキ科ツバキ属の常緑木。茶花として人気。ほころびかけた蕾を茶室に使う

ヤブツバキは日本原産ですが、ワビスケは外来種です。加藤清正が朝鮮半島から持ち帰ったという説や、利休と同じ時代の茶人・侘助がこの花を育てて茶事に使ったからこの名が付いた、ともいわれます。ひっそりと控えめに咲く一重の小ぶりな花が特徴で、白侘助や紅侘助、胡蝶侘助などがあり、十一月から四月に花が咲きます。

家紋

それぞれの家にある家紋。自然や建物、植物や文字などがデザイン化され、美しい形になってきました。家紋には様々な願いが込められています。

イラスト：下田麻美

茗荷（みょうが）

主な使用家：稲垣、小沢、羽田、水谷、中村

茗荷の花をかたどり、「冥加」に通じることから戦国時代以降、天台宗の摩多羅神の神紋として使われ、日光東照宮の紋です。目に見えない神仏の加護を受けるとされ、縁起の良い信仰心の厚い家紋とされていました。

巴（ともえ）

主な使用家：宇都宮、大石、西園寺、梅園

弓を引く武具・鞆絵（ともえ）をかたどったもので、最も古い文様のひとつです。神社などに巴紋が刻まれているのは、巴が水に通じていることから、火除けの呪としているためです。藤原氏から出た武士が使うことが多い家紋です。

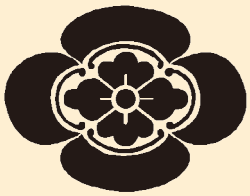
目結（めゆい）

主な使用家：佐々木、武藤、椎名、飯田

糸を使った染めの技術で鹿子染や鹿子斑ともいわれ、糸でくくった箇所が白く残る模様です。古くは奈良の正倉院にも残されており、平安鎌倉時代には衣服や幡の模様として使われてきました。佐々木高綱の紋として有名です。

木瓜（もっこう）

主な使用家：朝倉、織田、池田、田中、和田



神社の御簾の帽額（もこう）に使われるため神の加護があり、鳥の巣を表しているので卵が増えて子孫繁栄を意味する紋です。京都の八坂神社、博多の櫛田神社、愛知の津島神社、兵庫の広峰神社などや織田信長の紋でもあります。

日本の祭

埼玉・秩父夜祭

開催：十二月二日（日）～三日（月）
会場：秩父神社から御旅所
写真協力：秩父観光協会

由来：崇神天皇の時代に知知夫彦命（ちちぶひこのみこと）が国造に任じられ、その知知夫彦命の祖神である八意思兼命（やごころおもいかねのみこと）を祀ったのが秩父神社です。鎌倉時代には、秩父氏の祖先・平良文により妙見菩薩が合祀され、妙見宮秩父神社となりました。江戸時代には秩父大宮妙見宮として栄え、古くからの秩父神社の形が神幸祭などに残り、例大祭の「付祭」として、笠鉾や屋台が曳かれ始めるようになりました。かつては「霜月大祭」と呼ばれ、旧暦の十一月三日に行われていましたが、明治時代に新暦の十二月三日に定着しました。「お蚕祭り」とも呼ばれ、養蚕が盛んな地域の祭りとして絹大市も開かれました。

見どころ：日本三大曳山祭のひとつ。花火と提灯が灯る六台の笠鉾・屋台が見事。

福岡・鷽替え・鬼すべ

開催：一月七日（月）
会場：太宰府天満宮
写真協力：太宰府天満宮

由来：「鷽（うそ）」は漢字で「鳥（まなぶかんむり）」がついた学問の神様の鳥とされます。「鷽替え神事」は、知らないうちについた嘘を天神さまの誠心に替え、これまでの悪いことを嘘にして今年の吉に替えます。暗闇の中で「替えましょ、替えましょ」のかけ声のもと、手にした木鷽を交換しますが、群衆に紛れた神職も当たり印のついた木鷽を交換し、最後にその木鷽を持った人に年の運が訪れます。「鷽替え」は六回行い、合わせて十二個の金鷽が当たります。同じ日の夜に行われる「鬼すべ」は、菅原道真の曾孫、菅原輔正によって始められ、鬼を退治する「燻手」、鬼を守る「鬼警固」、「鬼」に分かれ炎での攻防戦が行われる厄払いと招福の行事です。

上・鷽替え神事　下・鬼すべ

見どころ：（**鷽替え**）手にした木鷽は持ち帰り、神棚に飾ります。（**鬼すべ**）夜空を焦がす御神火。燃え残った板壁は持ち帰り、玄関先に火除けとして祀ります。

神宮館社長木村通子の 暦とわたし

師走の足音がすぐそこまで聞こえてきました。皆様いかがお過ごしですか。平成二十五年神宮館高島暦は、現在書店の店頭に並んでおりますが、お手に取って頂けましたでしょうか。高島暦の中の用語がよくわからない…というお声を時折頂きますが、暦の世界をよりやさしく理解して頂くために「こよみを使って開運できる本」（五二五円）も発行しておりますので、併せてお読み頂けますと幸いです。

本年は私にとって、転機の年となりました。社長に就任して約一年、新経営の体制も整い新たな課題に奮闘する日々です。他業種とのコラボレーション店のオープンなど、いくつか新しい試みにも挑戦しました。

しかし、「読者の皆様が幸せで安らかな毎日を送るお手伝いができれば」という気持ちは、ゆるぎなく変わることはありません。自分自身も、もっと暦を上手に活用できればと勉強を続けております。来年は、より色々な形で神宮館と私の思いを発信する場を作りたいと思っております。

皆様が末永く暦を愛して下さるお気持ちに、心から感謝し、より一層ご満足いただける商品・サービス作りに努力する所存です。今後も、変わらぬご愛顧をよろしくお願い申し上げます。

通子のお気に入り

東京・上野に生まれ育った木村通子の親しんだお気に入りの数々を紹介していきます。

三十年以上変わらない弊社の鏡餅。昔は祖母が、鏡開きの後に木槌でたたいて、「揚げもち」を毎年作ってくれました。つい仕事に追われる日々ですが、新年には子どもにあの味を伝えるべく、揚げもちに挑戦したいと思っています。

次号のお知らせ

（二〇一三年二月立春のころお届け）

七十二候（春）
しきたり　お箸の使い方　他
花　カタクリ　他
家紋　沢瀉、雁　他
日本の祭　新潟浦佐裸押合い祭　他

この季刊紙名の「ももとせ」は「百歳（ももとせ）」。当社創業百周年を記念して、この名前をつけ創刊しました。

FSC www.fsc.org
ミックス 責任ある木質資源を使用した紙
FSC® C007468